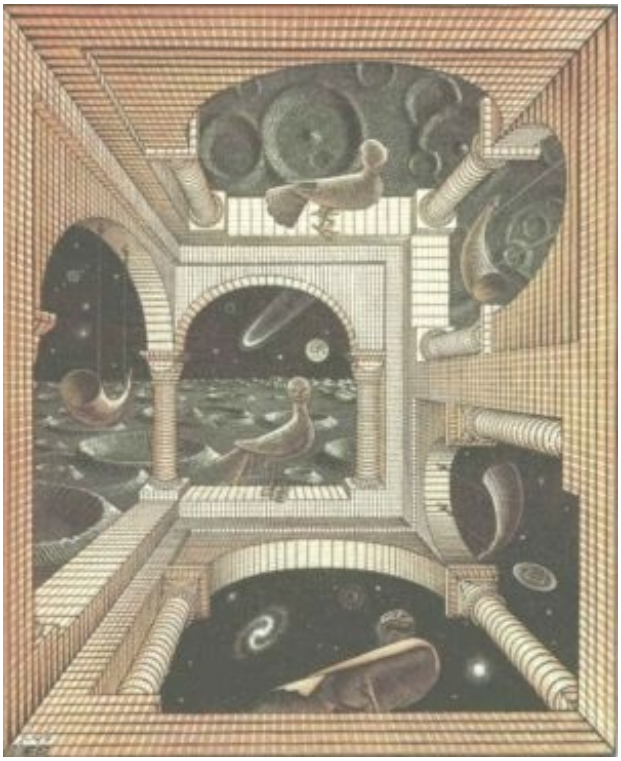


序章

*　あなたは、この地球上。。。そう、あなた方"人間=HUMAN"が、そう呼ぶこの惑星上に。。。君臨する唯一無二の知的生命体だとお思いですか？*

あなた方は種としての長き繁栄と栄華を極め唯一無比の支配者として君臨する。しかし醜い諍いで互いに争い傷つけあうばかりか、膨張した"文明"とやらの産物は豊かだったこの惑星にも際限無き搾取・破壊を齎し繰り返し、飽食を享受する事に没頭す。…今、この惑星"地球"は取り返しのつかない事態に陥っている事に気付かぬ侭に！

そう、もうその記憶のDNAにさえ忘れられた遠い遠い昔の出来事が再び繰り返される事への恐怖は"我々"をも脅かす事態である事は間違いなく、遥か以前に訣別した大地・空、温かな陽の光、そしてあなた方と"我々"は再び対峙しなければ時期が来たのかも知れない。。。

【tom chambers】…そして音楽はalice coltrane"LOVELY SKY BOOT"

*この物語に使用された画像は飽くまでイメージであり不都合なものが有ればご指摘下さいませ。削除致します。

兆候そして最初の接触

【aomen,china　XX th.Aug.201X】

西暦２０１X年８月XX日 未明。

中国南部沖合いを震源とするＭ８超の未曾有の大地震が、台湾及び対岸の福建省沿岸部を襲った！

明け方の空に赤い閃光と厭な雲が立ち上り、まるで巨大な龍がうねり暴れたかの如く煉瓦を積み立てた無数の旧来の低層の建築物、そして近年の経済的成功を物語る近代的なビルディング群は脆くもその築き上げてきた文明の主と共に一瞬の内に倒壊し、遅れてやってきた数階建てのビルの高さに匹敵する津波がその瓦礫と共に幸いにも地震の難を逃れた生存者を無情にも呑み込んでいく。。。沿岸部から内陸へ数キロに渡って、近年繁栄を極めた都市のひとつである美しい街である厦門も含め泉州近辺までの都市機能は完全に停止…沈黙し不気味な静寂が辺りを包む。。。

アメリカ海軍第７艦隊 空母ジョージワシントンより飛び立った偵察機は護衛の戦闘機を二機伴い台湾南西部を飛行中である。被害状況の確認・空撮がその任務で、たまたま別任務取材で同行していたAP通信社のダグラス・ツカモトも搭乗していたのである。。。

しかしこの地震はあなた方だけではなく"我々"にも深刻なダメージを与えた！
あなた方が"台湾"と呼ぶ島の東方から続く深い海溝部、其処に"我々"の点在する居住区のひとつが存在していた。…それはポッドと呼ばれ完全に制御された圧力コントロールにより調圧された完全な球体。幾つかの連結されたその半分を海底の泥の中に固定された建造物は、あろう事か、この地震に起因する海溝斜面の土砂崩れにより、その一基のポッドが連結部から捩げ無残にも土砂と共に海溝の深部へ沈下して水圧により圧搾した数基とは別に水面に向かって浮上し始めたのである！
如何に"我々"の科学力が優れていても、この圧力制御装置が深度数千メートルの水圧を逃れる術は無かった…。しかし、この一基のポットは隔壁され再び圧力制御の為された…あなた方の単位で数十メートルに達する球体を今、海上へ。。。白日の眼の許に曝され様としているのである！

おお！何と言う事か？
訣別の日より長き、気の遠くなる様な年月を…、決して交わる事の無かった"我々"とあなた方の文明が今。。。
（"我々"はその意図にも拘らずあなた方の所謂"有史"以前から度々、目撃されている。…しかしあなた方の世界・創り上げられた文明・知識では"我々"の移動手段/工具をそして我々自身の姿を理解する事が出来ずに居る。。。ある時は
"怪物"
"悪魔"または"天使"
"外の惑星から来た異星人"。
"幽霊"
"神（この概念は"我々"には存在しない）"と呼び、
自分達の覇権下の"外的"存在として好奇若しくは畏怖、ある時は崇拝の対象とされてきた…。

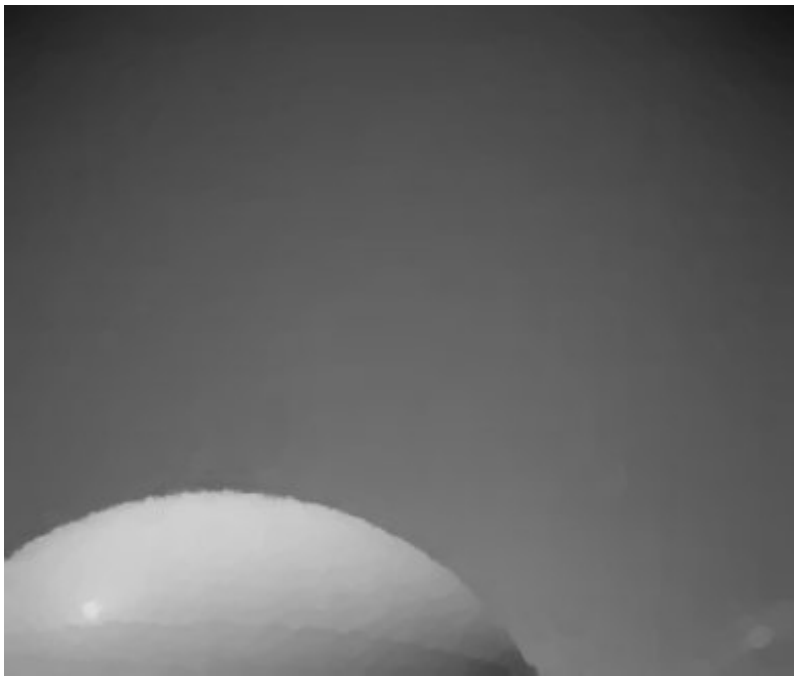
海面に向けゆっくり、ゆっくりと上昇を続けるポッド。

当然、中の"同胞"からは緊急信号が発せられ、近いポッドから救援用の"移動機"が飛び立つ。

"我々"の移動手段工具はあなた方の、簡単に言えば空気を燃焼させ推進力とする其れとは異なり、重力を制御する技術/装置を応用している。"同胞"一人が内部で操作する"移動機"は光（太陽光）を屈折させ電波（あなた方のレーダー装置）にも普通の状況では反射しない、あなた方の世界には存在しない"我々"の技術で練成された銀色の合金製。。。
２機の"移動機"は音の伝達の速さの数倍で大気中を飛行する。当然"我々"は別方向から飛来するあなた方の飛行機を察知していた。なんとしてもあなた方の目に触れる前にポッドの回収/移送を完了させなくてはならないのだ！
あなた方との接触を避けるのは最早、我々にはその先祖から伝わるDNAに刻み込まれた"本能"である。ある時期より別々の進化を遂げたとは言え、この天体に存在する我々の組成は基本的にあなた方を含む他の哺乳動物となんら変わりはない…。
迫り来る飛行機。目的地までの距離…操作桿を握る"同胞"の"手"はじわりと汗を分泌し、心臓は打楽器の連打の様に早く鼓動する。
『あともう少し！』
アドレナリンは大量に分泌され、焦る気持ちは尚更身体を硬直させる。。。

ポッドは尚も浮上を続け、そして遂に無反射の銀色の甲殻に包まれた完全な球体
は海面にその姿を現したのである！
二機の"移動機"の"同胞"はやはり反重力を応用した"楔と紐"をポッドに向け射ち込む。
最早、この原始的方法でしかポッドを回収移送する手段は存在しないのである。
単機では音速で航行出来る"移動機"も、この大きな球体を抱えては話にならない、
一旦 海面より空中に浮かせ、移動機とのフォーメーションで固定させ再度、海中を。。
。あなた方の目を掻い潜って最寄のポイントまで移送するのだ。
なかなか持ち上がらないポッド！
接近する飛行機！

『駄目だ！間に合わない！！！！』



『な、なんだあれは！？』

最初に目のあたりにした副操縦士が叫ぶ！
まるで巨大なガスタンクの様な物体が海面付近を浮遊しているではないか！？

『どうした？何かいるのか？こっちには何も捉えてないぞ！』
振り返ったＲＯ（レーダーオペレーター）は食い入るように目前の機器にへばりつくが、そこには何も表示しない。。。

『キャ、キャプテン。。。』
副操縦士が我が目が視認した物体を現実のものだと同意を仰ぐべく隣を見た時、同様な心持もち

なるも機長は即座にＡＣＯより二機の戦闘機、母艦に通信を指示。騒然となった機内、職業本能的にカメラを構えたツカモトは他のレーダー士官達と共に身を前方に乗り出し、パイロットの指差す方角に目を遣る！

そう高くない高度よりツカモトの目に飛び込んできたのは２時下方、海面に影を落とし浮遊しているようにも見える球体。

『地震で海岸線のタンクが破壊され海に漂流してるのか？…しかし？』
ＮＩＫＯＮ製のカメラをその方向へ向けて構えファインダーを覗いたその刹那、２機のＦ３５戦闘機が降下して行くのが視界に入った…。

固定されたポッドはようやくコントロール可能な状態に。。。
2機の移動機はフォーメーションを確定させるも、その間中、警報音は鳴り響き緊迫感はピークに達する！
鼓動は尚も激しく高まり、海面上の球体を再び下降させ始めたその瞬間、あなた方の飛行機が轟音と共に視界に飛び込ん来たのだ！

『視認された！』
一機目が頭上をかすめ２機目の飛行機が迫ってくる。。。重力と海水の圧力をも制御する各装置が機能する今ポッド（と移動機）は再び海面に到達、あなた方の物理的速度では決して有り得ない速度で、その中に全容を沈めるのである…。
その時、警報音に混じってもうひとつのシグナルが発せられた！偶然、上方に居る速度のそう速くない旧式のあなた方の飛行機の中に"被検体"＝パレーテが存在している模様だ。有用なのか不明ながら咄嗟に左上方のパネルに接触し特殊な信号を送る！

『うっ！？』

被写体へ向けシャッターに指が掛かって押したその瞬間、ファインダーの中の視界は突然、真っ白になり、電気ショックを受けたかの如く頭の中が激痛に襲われる！

『どうした？ツカモト！？』
激しい痛みにツカモトは、狭い機内の中もんどり打って倒れこんだ！
経験した事のある痛み。。。
激しく痙攣する身体。。。
フラッシュと極彩色の連鎖と不可解な言語が脳を支配する。。。
薄れゆく意識の中、機内に響くエンジン音と自分を抱き起こす士官、機長の叫ぶような交信…その語尾の独特なテキサス訛り…
・・・。

かつて見たことのある夢。。。

異様に暑いその年の夏。

現通信社の勤務地である上海(shanghai)に、担ぎ込まれた日本の沖縄(okinawa)から佐世保(sasebo)基地を経て長崎(nagasaki)経由で戻ったのである。

近年、経済発展したこの都市。

赴任してから既に５年近くが経ったが、暮らしているこの古北(gubei）と言うエリアは外国人の駐在者が多く暮らす地区であり、"箸の国"とは無縁の生活であった自分にとっても不便を感じる事は、時として無秩序なマナーや其の辺の処を除けば少なく至って快適な生活を送っていたのも事実。しかも時差の関係でよっぽどの事が無い限り昼夜が逆転する本国とはメールでの遣り取りがメインであり、本部勤務時の目の回るような煩雑さからもある意味解放されていた事もあり精神衛生上、随分"お気楽"な毎日ではあった。

非常に埃っぽい街ではあるが、上層階ということもあり普段からもクーラーをかけたまま少しだけ開けた窓からの風に少し揺らぐカーテン…。

あれ以来、急に襲った正体不明（*okinawa,saseboでの軍病院、空港のある町の日本の国立病院で診断・精密検査して貰った訳ではあるが原因はまったく不明であり結局の所、まったく無縁の"ストレス"やら軍用機搭乗による空気圧の関係やら・・・で片付けられた。）の頭痛はそれ以来、再発はしていない。。。頭痛？。。。痛み。。。そう、それは遥か昔に経験した事のある鈍痛を伴う記憶。

ヴーン…。。。（*空調の唸る低いノイズ）

大きく見開いた月が照らす夜。
少し開けた窓の外から聞こえる微かな外界の喧騒は広がりの無いmonoralに響き…

僕はベットに横たわった侭、まるで昼間の如き外を透かすカーテンが揺れているのを眺めてる。
。。

浅い眠りと、まどろみの延長…"あれ"以来どうもそんな夜に苛まれている。アルコールに頼って深く睡眠に落ちる事もあるが、自分も健康に留意しなければならない年齢に差し掛かりやはり毎日は避ける傾向にある。そんな夜は決まって"夢"に苛まれるのだ。。。

レムの隙間に薄目に揺れるwaveを見つめ、寝ているのか？起きているのか？それすらも自分でも判別の付かない虚ろな意識下。幼い日のあの耐え難き痛みを伴う"体験"が今、此処で正に起こっているかの如く蘇るのである…。

全身はじっとりと汗ばみ、そして序々に硬直してゆくのだ。。。

薄暗い部屋。

…しかし外からの月の光（？）に浮かぶ複数のシルエットは人影。

視線に入ってきたのは

そんな微光に鈍く光沢を放つ金属の小球体。それは棒付きのキャンディ程の大きさの。。。

白衣を纏った男の手先から**15**ｃｍくらい伸びた細い針金のような棒（*先端から**5**ｃｍくらい角度がついている。）の先端に乗っている。

そして其れはかすかに振動しているのか？ ブゥゥゥン**…**と低く唸るかの如き音を発している。

『これは、クーラーの音か？』幾度目かの同じシチュエーション、しかし都度、毎回、夢か現実なのかはかれず居る。

顔から**30**ｃｍ程の距離。

近付いてくる**…**。

鼻先で一度、躊躇するかの如く停止する手。

そして再び動き出し、 真っ直ぐ僕の鼻腔に向かってくるのが判る！球の先端部が気道を塞いだ！

『ま、待て！どうする気だ？』
（『待って、それは何？どうするの？』*幼き日の僕の声）

金属？その鼻先に当たった感触は金属の冷たさ其の侭、しかし其れはまるでビロードの様に滑らかで一瞬、鼻腔を捉えた瞬間、変形したみたいに感じた。

『やめろ！そんな大きなものが入るはずないだろう！！？？』叫んだ！
（『やめて！痛い！そんなの入れちゃ嫌だ！ママ、助けて！』*幼き日の僕は叫ぶ）

しかし男の指先は容赦なく力を込め押し込んでくる！

その大きさの"球"は物理的に鼻腔を通りっこない。その固定観念が更に恐怖に歪む思考回路を破壊した！

『ぐわぁぁ～！！』 激痛で言葉にならない呻き声を上げ続け僕は気絶した。。。

（『痛い！わぁぁぁ〜！』*同）

…その刹那、**"**球**"**が生き物のようにぐにゅり！と動いた気がしたが意識は既に。。。

『…ぁぁぁ！』その叫んだ所＝気絶する瞬間、決まって目を見開き、僕はそれが"夢"なのだと悟るのである。

そう、"夢"と同じ体験。。。

それはまだ幼かった或る日の事、僕は交通事故に遭った。
後に母親から聞いたのだが 其れは轢逃げと思しい自動車事故、意識不明のまま僕は親切な通り掛かりの人に担がれて病院に搬送されたそうだ。その間半日近く行方不明だったようで両親は右往左往した様だが、その空白の"間"に朦朧とした意識の中、僕は確かにこの"夢"と同じ苦痛を伴う施術（？）を受けた！

足を骨折したものの、幸いあとは軽い擦り傷を負ったくらいで命に別状はなかった。

その後、母親に何度もその"施術"の事を話しても幼い子供の戯言か"夢"で魘された…くらいにしか思われず信じては貰えなかった。事実、頭部のレントゲンには"そんなもの"（球体）なんか影も形もなかったのだ。

結局、犯人は捕まらず、僕を病院に運んでくれた親切な方の所在も掴めず（*病院に残った記録の住所には該当する人は存在しなかった）、やがて時間が経過して行き僕も成長するに従って、事故の事は忘却の彼方に置いて来た…かの如く記憶から薄れていったのである。そして"施術"の事も結局、夢の中の事ととして同様に。。。

はじめて『被交通事故児童医療共（救）済基金』と言う団体から案内が届いたのは、そんな頃のこと。

幾つかのケースに該当する後遺症の懸念のある事故児童を、ある慈善団体・基金の資金を元に長年に亘って医療提供されるというものらしい。ごく普通の一般家庭に育った僕ではあったが経済的に随分助かったのではないかと思う。

事実、居所を変えても定期的に検診の案内は届き続け、其れはネットワーク化されている様で合衆国内は勿論の事、奇特なことにこの年齢になっても更に、赴任先の中国の上海にあっても先日、受け取ったばかりである…。

"案内"の指定日。

睡眠不足の眼をこすりつつ久し振りに支局に顔を出すと直ぐに局長の部屋へ呼ばれ、カメラ等の機材を渡された…。

そう、あの台湾沖の"漂流物"事件の際、機内で意識を失ってから機材は全て軍によって没収・管理されており結局、我がNIKONに何が写っていたのか？其れすらも自分は知り得なかった。

『ダグ、なにがあったんだ？』
ただ沖縄/佐世保滞在中も軍から聴取のあと執拗に緘口を強いられた事もあって、肩をちょっとすくめて

『気を失っちゃったから、実は…何も。。。情けないですがね』
とだけ応えると、局長はふんっ！と鼻を鳴らして手払いをした。カリフォルニアはホーソーン出身の巨漢の彼はぶっきらぼうだが面倒見の良いなかなかいい男だ。それ以上は詮索する事はなかった。

勿論、カード/メモリーの類は戻ってきた機材の中にはなかった…。

商売道具をカメラバッグではなく、ナイロン素材の所謂ヘルメットバッグと呼ばれる鞄に突っ込んで支局を後にする。
そして、この季節特有の熱帯のスコールの如き夕刻の集中豪雨を今日も予見するかの様な雲行きと遠い雷鳴の中、支局の入ったビルの目前でTAXIを拾って、指定された診療所へ向かったのである。。。

虹橋地区にある国際貿易大楼に入った支局から、指定の"診療所"は渋滞がなければ大凡、車で市内から郊外へ向け2〜30分の距離である。"七宝"…水路を生活の中心の場にした古い町並みを今は観光地化した"七宝老街"(qibao ancient town）に程近い旧い居住区と雑居ビルが混在とした地域に指定された診療所の所在地はあった。

TAXIを下車りるとほぼ同時にもの凄い勢いで雨が降り出した！雷鳴も近い。。。

NIKONの入ったバッグを抱えるように前の建物の軒下へ走る！そして中国語を話せない僕は、通りすがりの人に案内書を見せ尋ねる。声を掛けた傘を持たない初老の男性は無碍にも『XXX〜XXX！』と叫び足早に過ぎ去る…どうやら見るか見ないかのウチに"判らない！"と拒絶された様である。ここらへんは言葉は通じなくてもナントナク判る様になった。ようたく3人目の阿婆（おばあさん）は道沿いに"アッチ！アッチ！"と指を差す。

更に激しさを増す雨と雷鳴。

建物に掲げられた小さな番地の表示板を見るとどうやら数軒向こうの様だ。ずぶ濡れになりながら小走りにゆくと少し人通りも疎らな、どうやら外壁なのか屋上を数人の作業員達が工事中らしい雑居ビルの前、30弄32号、『あ、ここだ！』この余り高くない…恐らく5〜6階建て物の3階がどうやら"診療所"らしい。

『くそっ！表になにか看板出しておけよな！？』
やり場のない悪態をついてみても始まらないのは判っているが…。ぐっしょり濡れた衣服、薄暗い建物の中、どうやらエレベーターはない様で石造りの階段を仕方なく滑り易い足元に注意しつつ、僕は一段一段登った。

上海諾児医療中心（shanghai noah medical center) と控え目に掛かった看板。

『ここか。』
古い木製のドアがキィ…と音を立てて開く。

冷房のよく効いた小奇麗な室内。
事務机に応接（待合？）のソファ…何れもかなり年季が入ってそうだ。

『誰か居ますか？』
声をかけると、暫くして事務机の横の扉が開いて、普段着の上に薄青い色の医療衣を纏い髪を後に束ね、眼鏡を掛けた一見、地味そうな女性が出てきた。

『あのぅ、コレを…』
と、案内の紙を差し出す前に彼女は英語で僕の名前を口にした。

『mr.ダグラス・ツカモト…ね？ 基金の方から今日の予約承ってるわ。』
英語での遣り取りが出来る事に少し、ほっとした。

『あら？』
すると彼女はずぶ濡れの僕を見とめると、再びドアの向こうへ姿を消すと、タオルを持って出てきて僕に近付き渡してくれた。間近で改めて見た彼女は第一印象とは異なり、細身で長身。化粧気は少ないがアジア人独特の切れ長でない目尻、しかも二重瞼でくるんとした綺麗な瞳を眼鏡の奥に隠し、殆ど口紅のひかれてない容のよい唇は何処か故意に華やかさを押さえ込んでいるかの様に映る…。

其れは恐らく一秒の何分の１かの時間。

しかし彼女より少し背の高い日系アメリカ人を、下から見透かすかの様な視線にハッ！と我に返った僕は咄嗟に…ぼそっと『謝々依（ありがとう）。。。』と口に出す事しか出来なかった。

『上海語、話せるのね？mr.ツカモト』
くすっと笑みを浮かべる彼女、踵を返して事務机の方へ背を向けた。

殆ど唯一の言葉だった。

窓は塞がれている。しかし外から聞こえる雷鳴は近く激しい…。

ドアを開け隣室で診療衣に着替え、診察室に入ると其処にはもう何年（何十年か？）も見慣れた機械と見るからに新しい幾つかの機械とが数台、渾然と置かれた、そしてベッドが一台と机と一組の椅子、中の見えない薬棚…そんな景色を見て取れた。

初老の中国人医師は、どうやら英語は話せないらしい。

『どうぞ、其処に掛けて…。』
先程の受付（？）の女性が通訳してくれる。

机を挟んで医師と向かい合うカタチで座って問診をおこなう形で色々と応答を重ね、その都度、彼女が通訳した事項を医師がカルテに書き込んでいる。恐らくカルテにはアメリカの診療所から引き継がれた僕のこれまでの診察履歴が仔細に記されているのであろう、ポイントを絞っての問診が続いた後、レントゲン、心電図などの通り一遍等の検査が行われ、点滴と共に"検査剤"と称したなにやら仰々しい金属ケースに収められた注射を一本打たれる。ベットに寝かされ触診とマッサージを数十分受けた後、更に奥の扉の向こう、大凡この古びた雑居ビルに似つかわしくないCTと思しき機械に僕は横たわった…。

外の部屋からの指示通り腕を頭の上で組む。この体勢で機械の上部が身体を包み込むように移動してくる。その内部は高速で回転している模様で音も非常に煩い。

どこからともなく、お香の匂いを感じる。こちらでは日常的な事ながら、病院のしかも精密機器の病室では珍しいな？…とか思いつつ、しかし暫くすると此処の所の悪夢からの寝不足が手伝っての事からなのか？猛烈な睡魔がやってきた。そして数秒もしないうちに僕は眠りに落ちた様だ、それはとてもとても深く。。。（*遠くに微かに雷鳴の音を聞いた気がする…）

…。

『Mr.ツカモト、Mr.ツカモト…』
と、呼ばれる声で僕は眼を覚ました。

朦朧とした意識は今の状況を把握出来ず、薄くあけた眼の視界に眼鏡の東洋人の女性の姿を認めたところでようやく診察中であることを理解した。しかし相変わらず重い頭はまるで霧中を彷徨

っているかの如く…。

『其方の部屋のベッドに横になって』
そう促されて、おぼつかない足取りのまま老医師に支えられCT室を出た僕は倒れ込む様に再びベッドに横たわる。しかし睡魔からは解放される事はなく朦朧とした状態は続く。。。

おぼろげに手足、頭に機器の線が装着されている様だ、また心電図？身体はぐったりとして動かず、眼球だけは相変わらず薄くしか開かない眼から辛うじてその様子を窺い知る、しかし眠気に眼を開けている事は侭為らず再び。。。

ドン！

装着が終えたと思しき次の瞬間！とりわけ大きな雷の音が轟いたと思ったら凄まじい衝撃と電気ショックが襲う！！
部屋の彼方此方の機械から火花が散り"ボン！"っとその機械のなにかが暴発する音！部屋の電気が一斉に落ち僕は激しく痙攣し激痛に叫び声を上げた！！

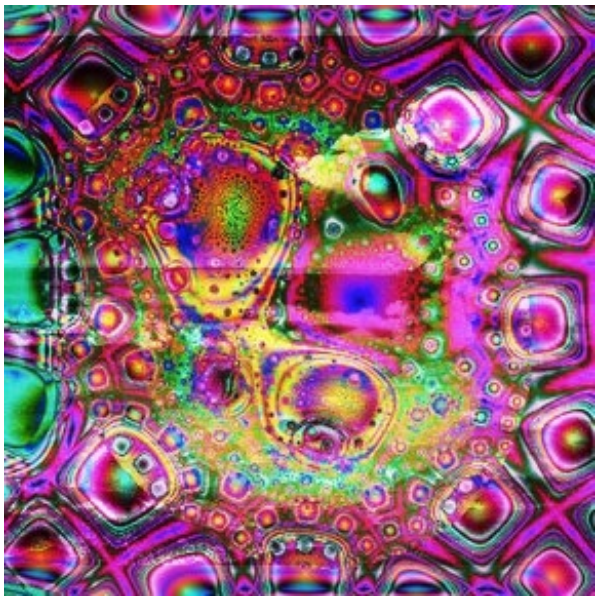
パァ！…っと、何かが頭の中で弾ける！

一瞬のフラッシュの閃光！次の瞬間、極彩色のイメージの波がひとつ、そしてまたひとつ…

最初はゆっくりと、やがてだんだんとスピードをあげながら拡がってくる！ 激痛とともに拡がってくるイメージの洪水。

『な、なんだこれは？？』

捉えきれない断片、そして欠片…それらは記号の様であって映像化されているドミノ崩し。。。
可視的に僕の"眼"が見ているのではない！頭の中へ、脳へ直接描き出される瞬間のスライドを苦痛の中で僕の全神経は其れをひとつひとつ欠片を拾い集め構築し理解しようと機能し始める！



掴み切れない高速に展開する紙芝居か走馬灯…その極彩色のイメージの中に見え隠れする"映像"を我が神経は必死にまさに紐解くように解読しようと努める！

既視感？。。。いや、それはイメージ・知識として知っている"出来事"がファイリングされている感じなのか？

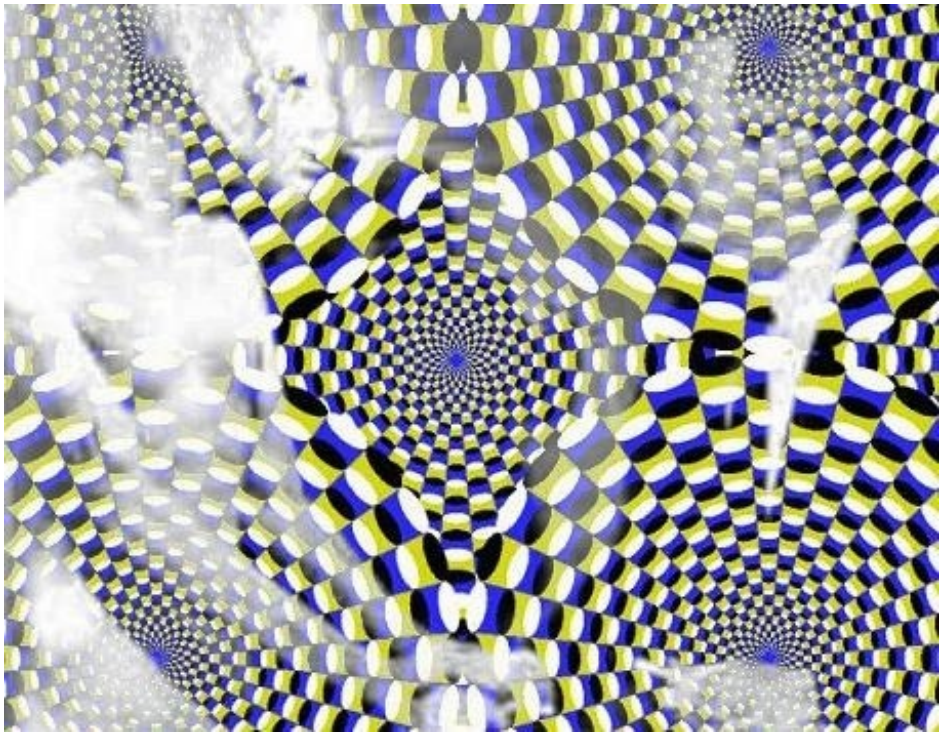
『あ、ありえない…』

近年から遡ること大凡、映像/写真の類が存在しない時代の事象が、ランダムに脳の中に自分の中枢に流れ込んでくる。其れはまるで客観的に纏められた人類の歴史の類。。。そう！正に歴史だ！

甲冑の兵士達が剣を振るう…ローマ帝国か？そして原子爆弾の炸裂する模様。サバンナの原住民と野生動物、見慣れたニューヨークの…これは'30年代か？大草原の数１千騎の騎馬軍団がゆく。。。同時代、海を渡って大風で沈みゆく旧式の船団、巨大な象を追う人影etc etc

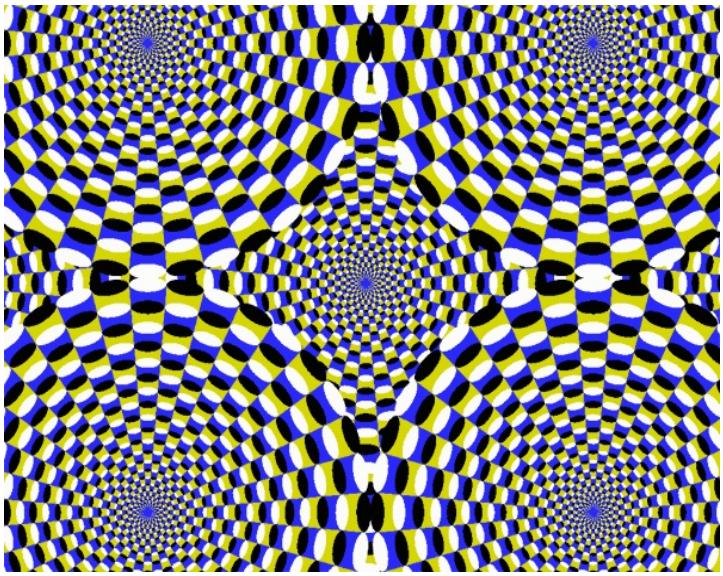
そして、時折、映し出されるこれは何だ？人影の様な？

何十枚、何百枚。。。いや何千枚ものイメージにひとつ、ふたつ混じっている其の姿は、見たことも無い…いや、それは。。。



バチン！

最後のイメージが映し出された時、頭の中に入ってくるイメージは突然遮断される！



我に返った僕は、繋がれたコード類を無意識・本能的に引きちぎり、彼方此方、機械類に火花の飛ぶ…しかし暗闇に包まれた部屋の中を、診察室を飛び出し入ってきた受付(?)の机の所に置いてあった自分の鞄を掴み、外へ飛び出す！

『mr.ツカモト 待って！』

女性の叫ぶ声を振り切って診察着、スリッパのままバン！っと扉を空け、薄暗い階段を滑って何度も転びながらも駆け下りる！ビルの外に出ると人だかりが出来ており、その目の前には作業着が所々破れ焼け焦げた人が２人程倒れており…"そうか？落雷かなにかで。。。？" まだ朦朧とした意識の僕はざわめく人並みを掻き分け、明らかに異様な装（いでた）ちの侭、通りを横切りタクシーに飛び乗りそのまま後席に倒れこんだ。

『去哪里？』ちょっと驚いた様な司机（ドライバー）はそれでも職務習慣的に尋ねる。マンション名を告げると其の侭、意識を失った。

そして意識を取り戻したのは夜。自分の部屋のベッドの上だった…。
（…コンシェルジェ、保安に抱えられ部屋に運び込まれたらしい）

『まったく、アレ以来なんて日々なんだ。。。それにあのイメージは？？一体。』
理解不能な今日のあの検査での出来事。大凡、想像の域を超えた体験をなんとか整合しようと、ベットに横たわったまま努めるのだが…。

その行為を遮断するかの如く、部屋のインターホンが急に轟く。

壁際まで歩を進め、1Fセキュリティと繋がる画面を覗くと。。。

『君は？』

この惑星の地表下はかつてない状況にある事は先にも述べた。。。かつてない…いや、厳密に言えば気の遠くなる様な年月の以前にも幾度か起こった事なのではある。其の原因は幾つかの複合要素が挙げられるが、あなた方の呼称で"太陽"と呼ばれる恒星の特異な活動に起因するところは大きい。

また地質的な変動・・・"軸"（あなた方が地軸と呼ぶ北極点と南極点を結ぶライン）の段階的なズレ。不安定な地下マントルの異常活動が引き起こす結果としての内部崩落・地震、更に先の"太陽"活動の影響が引き起こす我々の居住層の致命的な温度上昇。表層的な気候的な異常は"あなた方"から見えない"深部"で活きる我々の世界では既に末期的とも言える状況なのである…。

その物理的要因だけで我々は"移住"を余儀なくされている事は最早、避け難き現実なのであり、"訣別"以来、我々の存在をあなた方に知られる事なく、この同じ"惑星"で絶滅する事無く種の継続が為されてきた事実は生き抜く為の知恵・刻まれた本能と言わざるを得ない。

日々、今この瞬間も地殻層に点在する幾つかの"ポッド"が圧し潰され数え切れない同胞がその命を落とす。。。
（先の海面上に、あなた方の面前に姿を顕した例は稀な例としてもだ）

此処では未だ語らないが、そう遠くないと言われる将来、この"惑星"は次の段階への"進化"を控えており、"其の時"を迎える迄、そういう意味では生き延びる事 は必須なのだ！物理的なことと精神的な（敢えてこう表現しよう・・・）ことは切り離してはならない。。。

我々の居住する、地下深い"場所"。。。

この惑星のそう多くはない各地にに点在する。最も大きな"場所"は、あなた方の呼称でチベットと呼ばれる場所の地下深くに"首都"（スル・マルテ）として極近年まで存在した。そう、ついこの間まで。

また機会があれば詳しく述べるが、この地下都市はある理由で現在は完全に廃都となりその地下空間も完全に閉じられている。其れまでも長き渡ってこの地の地上の領有を巡っての諍いは続き、あなた方の年号で1930年代から1950年代にかけて…近隣を治めた"大国"がこの地（地上の）を完全に併合し統治下においた。それは、政治的な思惑と言う表層的なものではない。古来、この土地の選ばれた"一族"（その一族は"使徒"＝ツァルヴァと呼ばれた…）を通じ我々は接触をはかっており、我々の世界観・思想の一部もあなた方の事を知る（把握する）のと引き換えに伝えられてきた。完全に守られ続けていた秘匿。。。

しかし我々の存在、そしてあなた方の"文明"とやらにはない力・技術の存在を知ったその"大国"は、其れを手中に収めるべく行動を起こした。そして最終的に我々最大の都市のある地上部分は完全に手中にしたのである。
*（*我々を"秘匿下"に容認し続けた所管した者が隣国に逃れた際、そう多くはないその一族＝ツァルヴァも多くは拉致殺害され（*殆どの忠実なる者達は自白を強要されると自害した...不幸にも。。。）、追随を免れたツァルヴァの一部は一緒に隣国に逃れ、ごく一部が"大国"内に紛れた。）*

*"大国"はあらゆる手段を駆使し得た情報から徐々に範囲を狭め、彼らの手がいよいよ我々の居住区に程近い場所を探り迫ってきた（*核心的な場所特定は出来ては居なかった様であるが...）その地上の併合から数年後、我々は争う事をしない代わりに、この最大の都市を完全に閉じる事を決めた。。。*

*長い時間と気の遠くなるような労力を掛け　　我々は点在する各都市（マルテ）そしてポッドへ移動、そして完全に移住が完了した時。この地下の空間（*自然が造りだしたものを加工し建造された...）は我々は存在の痕跡を残さぬ自己処理の本能・習慣に則り、可能な限り地下マグマへ投棄され、最後は爆破され落盤により巨大かつ荘厳な地下空間都市スル・マルテはあなた方の目に触れる前に完全に無に帰したのである。*

その際の衝撃は大地震となり地表にも少なかざる被害が発生したと聞く...　　。

現在のスル・マルテは、当時 第二の大きさを誇った此処、あなた方の呼称ではアメリカ、ネヴァダ州の砂漠地帯の地下深くに存在する・・・。

軋む厭な音。。。

微弱ながら揺れを身体は感じる。。。

いつ巨大な揺れに突然 襲われるかも判らない。。。

…頭上の岩盤が崩落し圧し潰される恐怖。。。
（思想的に…"死"への心理的対処方は心得るが、痛み、そして概念的な恐れからは逃れられない）

掻き立てられる不安。。。

地殻の動きを知らせるサイン、そして地震を予知する警報が轟く！ そんな日々・・・そう日々。あなた方が太陽と呼ぶ恒星"ラー"の恩恵のないこの場所では、造られたラー（*我々に有害な成分を予め排除した）が同周期で昼と夜を紡ぎ、其れを日々とする。所謂"暦"もあなた方の其れとは異なるが一日という概念は何ら変わりがない・・・。

重力を制御する我々の"技術"は勿論、何ものにも勝り有用ではあるが、その技術を応用した波動の"隔壁"は最大の出力でこのスル・マルテの空間を保護する様に稼動はしているものの、大規模な巨大地震による崩落からこの地下の空間を守る事は物理的に不可能である・・・。

無力な…。

この異変にある意味 無知なあなた方・・・局地的な"異常"としての認識はあるものの、まさか此れが惑星規模での活動であるとは想像すらしていない（*我々がこの異変を気の遠くなる様な周期の"必然"と断定したのも極々近いのであるが）・・・と何ら違いはないのである。無力・・・そう、まったく同義な。

この地＝あなた方の呼称ではアメリカ合衆国のネヴァダ州＝の地殻活動は遥か以前に表層的な活発な動きは収束していた。しかしながら変遷期のこの異変は此処として例外なく、そして容赦なく我々にのしかかる・・・。備えと言えば大凡あなた方が踏み入れないであろう場所の地表近辺に迄伸びる幾本もの長い長いトンネルと、その出発点であるスル・マルテの各地に待機する避難移送・移動機を可能な限り準備する事。そう、我々は既に"首都"たる此処さえも放棄する覚悟は出来ているのだ！予知機械が予測する長期的な動きではもうそう遠くない時期に終末的な事態が発

生する事を明確に顕している。あとはどのタイミングで"移住"を実施するか？

恐らく地震が発生して崩落するまでそう時間は掛からないであろう。最早、マグマに痕跡を残さず・・・などと悠長な事を言っている時間などないのである！

予知機械が顕すその"時"は、あなた方の暦ではあと１７箇月以内・・・しかし"其の時"を確定は出来ない。決行＝移住は急務なのである！

*莫大に増殖・膨張したあなた方の個体数（人口）と比較すれば我々は圧倒的に少なく微々たるものである（敢えて数字にはしない）。それでも惑星上に点在する我々の居住区である地下は今や何処も安住を保証出来る場所はない！あなた方風の呼び方をするなら"委員会""議会"とでも表現するのであろうか？（*ある年齢に達するとほぼ例外なく個々の意識が機械的に繋がり共有され統計的に処理される我々は"長（おさ）"と言うものを持たない代わりにこの統計を司るのが、この"委員会"＝スル・ディラウである。）　その委員会は当初、分散移住する事を採択したのであるが、この危機的状況に日々、変動する"統計"は安住の地である地下からのエクソダスを計り地上に"戻る"選択肢を、そう！我々は選んだのである！*

あなた方の面前に姿を曝し、そして・・・争う事になってもだ！

あなた方の文明とやら、そして科学の発展に伴い我々の"接触"の方法も変わった。。。

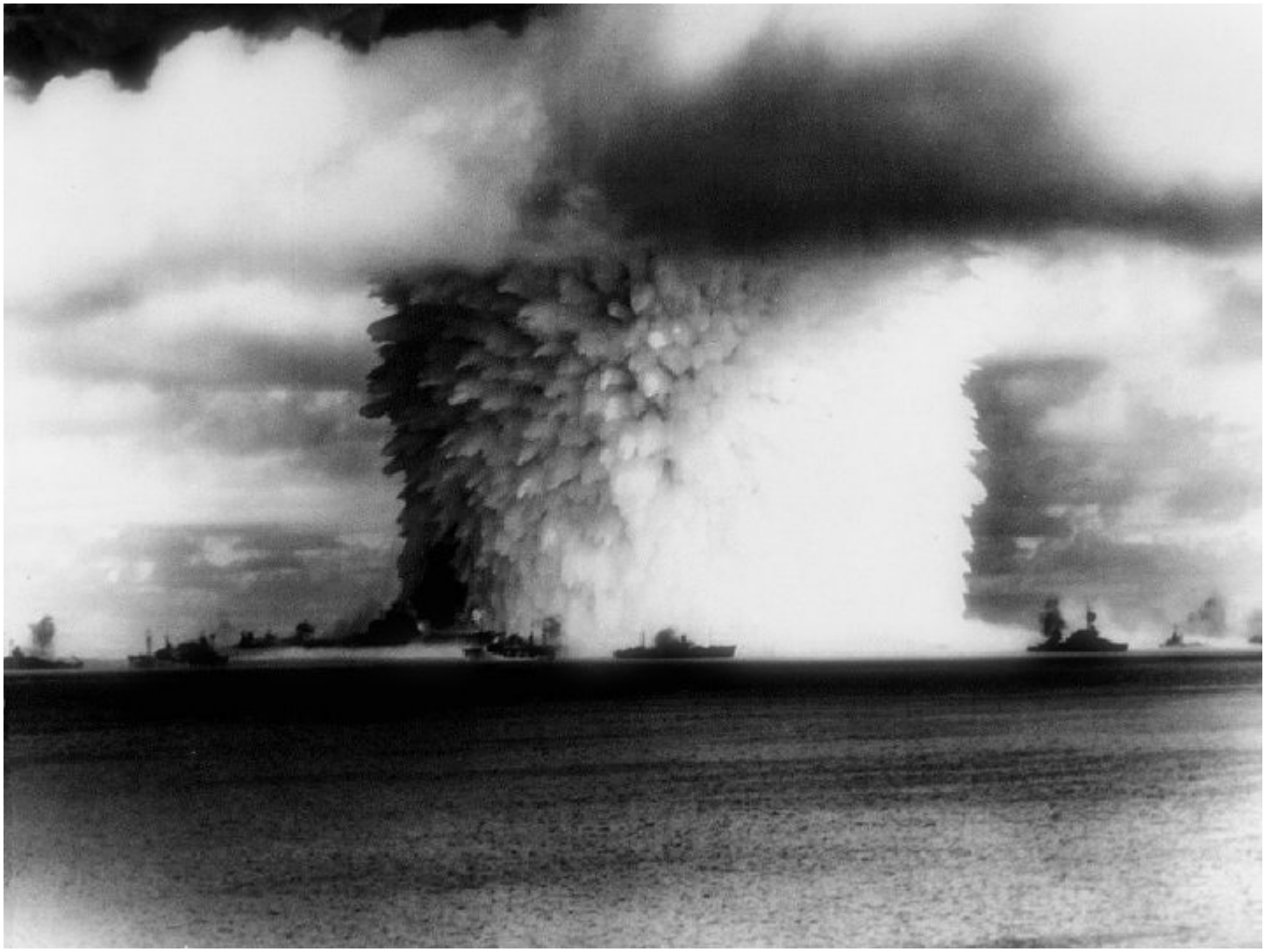
地上世界の表面的な覇権は、このスル・マルテの存在する地上・・・アメリカ合衆国に有ると認識している。

その長（おさ）＝合衆国大統領はある代より直接接触がある。そして決して口にされないこの事実は大統領個人の秘匿責務として我々には無駄としか感じ得ない派閥（政党）が変わっても個から個へ…と内密裡に引き継がれてきた。未だその秘匿は尊守されているようにみえる。そう、表層的には。。。

何故に、我々の居所の存在するこのネヴァダ州の砂漠で破壊兵器の実験が度々、実施されてきたのか？
何故に、この場所なのか？

そして

何故に、遥か南洋の環礁でなければならなかった理由は？



そう！其れは勿論、あなた方のイデオロギーとやらの対立抗争を優位に推移・進行させる為に開発した”兵器実験”と言う大義名分。しかし其れはその隠れ蓑の下で発せられた あなた方の我々に対する牽制、威力誇示以外の何物でもない事は我々も暗に認識している。故のこの”場所”＝あなた方（アメリカ大統領）が把握する我々の”居所”での行為だったのである。

　そして其の事実（大統領の命令系統）は何時の頃からか？あなた方の…そう、此方から眺めていれば悲惨・悲壮以外の何ものでもない諍い。。。あなた方が一回目、二回目の"大戦“と呼ぶ戦争の頃から劇的な変貌を遂げた！

あなた方の殆どが知らない本当の”支配構造”。それは…

”国”

”人種”

”宗教”

”主義”

そんな表面的にあなた方が其々、自分を帰属させ安心感を得、そして拠り所とする”

単位”・・・などでは毛頭ないのである！（この事実は我々の情報収集でも極近年に知りえた事。）

最早、大国や覇権国、その頂点に君臨する大統領。そんな構図は飾り物の陳腐以外の何ものでもなく本当の”支配構造”はその象徴的な者達（大統領をはじめ要職）を決して表層には顕れない闇の中から無尽に操る存在なのである。或る代の大統領は責務たる不文律を犯し其のもの達に我々の存在を明かした！

前スル・マルテ（首都）時代、その何代前から粛々と継続したたったひとつの”点”としての関係は劇的に変貌を遂げ、今や”存在の黙認”と”安全の保証”の見返りに与えた（提供した）幾つかの技術、それすら”保証”の対価・担保とは為らず。。。状況は最早、この惑星（そして恒星”ラー”）の異常活動による末期的な状況と何ら変わりはなく、その事実が我々に最終的決断をさせたのは間違いない事実なのである。

砂漠の真中に位置する基地・軍事施設の滑走路に着陸するairforce one。

全ての予定をキャンセルし急遽、此処nevadaの地に降り立つ大統領。

隠密裏の訪問、出迎えも疎らながら大柄の基地指令に伴われて足早に施設へ向かう。無言の侭、其の表情に余裕の片鱗も垣間見れない...。秘書官すらも知らされていないこの突然の訪問の目的、ただ伝わりくるただならぬ雰囲気に聊か動揺と緊張を隠しきれないSPを含めた最小人数の帯同側近達。

車が建物に横付けされ、司令を先頭にSPそして大統領と続き数名の側近達が長い廊下をまっすぐ行く。

セキュリティの掛った幾つかの場所を司令自ら掌の血管と瞳の二重の認証システムを元に扉を開け、それ以上立ち入る事を許されない側近達が先ずその場で大統領を見送り留まる。一行は更に施設の内部へ足早に歩を進める。もう一カ所の同様のセキュリティ・ポイントを通過した後、エレベーターの前、２名のSPと司令は地下最深部迄...それは階で表すと２０Fに相当するフロアまで一気に下りる。

誰も一言も発さない、沈黙が続き旧式のエレベーターのゴウンゴウン...と言う唸りだけが響く。。。

程なく最下層の目的階に到着すると、エレベーター室から隔壁の扉の向こう20mほど進んだところに小さな、しかし金属製の頑丈な扉が見える。此処でも司令は認証システムの手順に従い解錠する。全てがグリーンになったところで司令はさっ！と脇に避け、パネル横正面へ大統領は歩を進める。

上着のポケットに手を入れた後、大統領の手には旧式の"カギ"が握られていた（*これこそが歴代大統領に代々受け継がれてきた鍵である！）。そして表情を変えず、司令より促された箇所＝ドアのカギ穴へひとつ頷いた後に差し込む。右にゆっくり廻すと...

"ガチャン！"

と大きな音が響きロックが外れた。金庫型の取っ手に手を掛けた瞬間、大柄な司令は凛！と背筋を張り敬礼を、そしてSP達は其の後方へ下がり主を見送った。。。一瞬振り返りひとつ頷く様に会釈をすると、重い扉を自らの手で開き中へ...小さな小部屋になっている場所へ独り入ってゆく。その重い扉が閉ざされると重厚な金属音が響き同時にロックされた。此処からは一人旅、全てを...そう！まさに全てをその双肩に背負った"重責"に押し潰されそうになりつつも（そして就任来、初めての"接見"に、未知のモノへの拭い難い恐（畏）怖心を抱きつつ）、合衆国大統領と言う誇りを胸に一人の政治家、それ以前にひとりの"人間"は歩を進めるのである！

あなた方の時の尺度で幾年振りとなろうか？　　この場所で接見するのは。。。

*あなた方の最後の大きな諍いが終結してまだ間もない頃、今から数代前の大統領と取り決め作られた（*ツァルヴァの尽力に拠る）場所。それはこのnevada州の砂漠の中、指定されたポイントまであなた方の施設を構築し、遥か下方のスルマルテより伸びた坑道が其のポイント迄たどり着く。その"空間"こそが直に我々が相対する唯一の場所。*
*（*あなた方は名目上に研究施設としてareaナンバーを与えたこの場所の"本当の存在意味”を大統領と一部"機関"を除き知り得ない。）*

勿論、全ての歴代大統領と接見した訳ではない、

永きに亘ってあなた方を"研究"し尽くした...（完璧とは言えない迄も）...我々とは異なり、あなた方には我々に対する知識に余りにも乏しい。はじめて相対する"human"以外の知的生命体。あなた方の常識からすると異形な我々の容姿は恐怖の対象でしかなく、しかし"長"として勇敢に対話に臨んで来る者が居れば、恐怖に立ち尽くす者と様々であった。。。今回、この扉の向こう側に待つ"human"の（今や表面上の...）"長"は果たして？

一枚の壁を隔てて、長年改良を重ねた双方翻訳発声機（ベレモロシュワルゼ）を通して接見が始まる。。。

----（以下翻訳機のまま ）----------
はじめてお目に掛る、私は第49代合衆国大統領の〇〇〇〇である。

此処で会える事を光栄に思います。。。私に地位も名前はありません。

人類を代表して此処に居る。私はこの"会見"を通じて友好と信頼、そして秘匿に基づき互いの関係の更なる発展へと繋がる様、有意義なものと為る事を期待する。

同意であります。

この会見は代々、対話形式で行われて来たと伝え聞く。今回も其れに則って執り行う。。。
そして録音機材等の記録装置の類いは此れも代々の規定通りに持ちあわせない。

感謝します。

早速、はじめるとしよう...。
今回は貴方よりの緊急の会見の申し出、私は万難を排して此処に居る。受け継がれたるこの会見の歴史の記録にはこの様な緊急を要する事態はこれ迄、有り得なかった。。。
殊更、この様な事態たる特別な何か？ 早急なる議題たる事項が我々と貴方との間に存在するのか？その辺りから。

この度は、緊急なる我々の要請にお応え頂き、あわせて感謝します。

今回この様な会見を設けたのは...

その時！ズゥゥゥゥン...と低く響く様な微細な揺れを感じる。地震だ！！次の瞬間、更に激しい揺れが地下の空間を襲った！ 大きい！！壁一枚を隔てた部屋に夫々一つずつ存在する"生命体"は揺れにバランスを崩し身体を折ってもんどり打った！

尋常ではない揺れはシェルター並みのコンクリート厚で形成されたこの地下施設に於いても容赦ない！
数度、ちかちかと明滅を繰り返したが辛うじて電気は落ちずに持ち堪えた様だ。。。数十秒続いた縦に揺さぶられる地震は取り敢えず収束した模様。

中断してしまいましたが。。。率直に、そして極めて簡潔申しましょう！
今の揺れでもお分かりの通り、この地殻の異常活動に於ける地震等の影響で我々の
居住区である地下/海底の状況は大変、危険かつ困難な状況下に有ります。
どの程度の報告が上がっているかは存知ませんが、不本意ながらtaiwan近辺であな
た方の軍用機に目撃された我々の"機材"もこの原因に拠るものでありま。。。

（遮る様に...）
...機密事項として処理をしたが、あれは宜しくない。貴方がたの方がよく知ってるかとは思うが、貴方がたの存在はそもそも...いや"exist"（存在）そのものは現段階の我々、全人類に於いては決して知り得るべきものではない。皆が皆、貴方がたの存在自体を容認し共存共栄出来るレベルには達して居るとは言えないのだ！

重々に承知致して居ります。

...しかし、現在の地下の状況は、あなた方の"値"で何十億年のこの惑星にあって周期
的な改変の時！
平時とは状況が異なるのです！
遥か太古の時代、我々は地上を捨て逃れた。。。降り注ぐ宇宙線、隕石、天変地異、

灼け付き、そして極寒に凍てつき。。。勇敢な...いや、術を持たないあなた方は残り過酷な環境に耐え適応し見事に今の繁栄を遂げられた。増殖する個体数、あなた方の記憶にはもうその"起点"は尺度の外なのかも知れませんが、その間の長い長い太陽と月の満ち欠け。。。あなた方の増殖とは反比例し我々は種として数も減らし最早、太陽の紫外線そして宇宙線を受け活きる術は"装置"に頼ってしかその道はない。地上を...あなた方の"言葉"で表現すれば王国として未曾有の繁栄を築き上げた、その事には敬意を表し決して我々は争う事はせず永きに渡って息を潜む様にこの惑星で共存する道を選んだのです！

しかし繰り返しますが今の状況は異なるのです！

今、こうしている間にも少ない我々の"同胞"は押し潰され、またいつくるかも判らないその瞬間への恐怖へ同様に戦（おのの）いているのであります。

合衆国大統領！

世界の"長"として、今、再び我々の"種族"が地上に出て活きる事をご容認願いたい！我々には時間がないのです！

それは。。。

"種"としての決断。それが此処に一人の男に委ねられた...。
現代の世の中のシステムは数１００年程前の其れとは全く異なる。更に複雑化する支配構造、見えるものと決して見えないもの...。『合衆国大統領』その意味合いも同様に大いに異なるのである。最早、独断で"世"を動かせる程 単純なものではなくなってしまった。その"存在"と密接に絡んだ政治。顕在化しようとすれば例えその地位にあろうとも其れは過去の歴（実）史が物語る通りなのである。遡り過去の戦争に於いても同様に一独裁者の野望そしてその正義の鉄槌による挫折としか正史には記憶されていない、（*決して所業を正当化するつもりは更々ないが）しかしこの"闇"の部分への訴追の意は完全に歪められたカタチとしてのみ今に伝わる。。。

また数代前の大統領接見の頃より、この"秘匿"の原則は完全にこの"存在"に公のものとして認識さ

れる事と相成ったのである。其処からの圧力も次第に顕著と成り この三半世紀の間、決めかねていた...（量り倦ねていた相手の情報故）"態度"も徐々に決されて来たのではある。そして此処nevadaに赴く途上の特殊回線での遣り取りでは明確に或る"意図"を示された！

*途上では御座いますが。。。

*物語の途上ではありますが、昨年２０１０年より書き始めさせて戴きました当、小説 "ホミニダイ/別種"中の冒頭近く、『兆候そして最初の接触』の頁の文章表現に於きまして、下部の最終更新日：２０１０-０８-２０　１３：０３；１１の表記でもお判りの通り、当該頁の執筆は昨年の８月２０日に書かせて頂いたものであり、この２０１１年３月１２日に発生しました東北関東大震災以前に書かれたもので、決して今回の震災の様子を意図的に文中に描写、記したものでは御座いません。。。

只、余りにもその様子が酷似して居り、当時 書きました筆者自身が今、読み返し恐ろしくゾッと身震いする思いであります。

この表現が２０１１年３月末日現在を現状を鑑みました場合、不快なる表現に値するものと懸念し大変、申し訳なく感じて居ります。。。

２１**P**途中迄、書き進めさせて戴きましたところで、今回の災害が発生し下書き状態だった２１**P**を少し加筆３月１４日に公開致しました後、同日２２**P**を公開させて頂きました**...**。その当該箇所『兆候そして最初の接触』の事もあり、今後執筆継続を中止しようとも考えましたが、当小説は飽くまでフィクションであり筋も既に決まって居ります事から、誠に勝手ながら 上記を補足の上 この侭 執筆を継続させて戴くことをご容赦願えれば幸いで御座います。

なにより、震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに被災地ならびに被災された皆様の少しでも早期の復旧と復興を祈願するものであります。

式井　梢

筋書きも、事前の擦り合わせ、折衝を経た。。。政治の其れとは全くかけ離れた"接見"。

ただ突きつけられた余りにも重い現実。

代々この接見は壁を隔てた（*翻訳機を介しての）対話形式で行われてきた。会談の最後、部屋の一番奥の壁にある扉が開き直接"人類的形式"に則り握手を行うと言うものだ。対話内容は一切記録には残されない。。。

尚も微震が続き、不穏な気配を助長させるが。。。しかし表層的な苦悩の表情とは別に、この申し出に対する人類の答え。。。いや、その支配構造たる"存在"との大勢的方向性は既に決されている。
人類の代表者は重い口を開いた。。。

『其れは、我々全ての人類公然の許に貴方がたに居住地区を設け、地上で共存する事と捉えて宜しいのか？』

その捉え方で間違いありません。我々とあなた方 人類は共に互いの存在を認め、平和的約束のもと互いの不可侵を誓い地上での共存共栄をはかり。。。最後の進化の時を迎えるのです。

『先にも述べたが我々人類には未だ、貴方がたを許容するだけの準備が出来ていない。。。私の独断で此処で容認しても、全ての国の承認を得る事は相当な時間と...いや其れ以前にこ貴方がたの存在を公表した時点で全人類がパニックに陥るのは明白である！

それに加えて、平和的約束のもとに。。。云々と言われるが、そもそも貴方がたの優れた科学力を以てして我々を脅かす存在にならない保証はあるのかね？』

...先ずその承認を得る為の"時間"は、あなた方の尺度で構わないのですが、一体どのくらい掛るのでしょう？

３年。。。いや５年は最低でも必要と思われる。それでも全てを治める事は困難に近く...

長過ぎです！　其の様な時間的な猶予は一切ないのです！我々の予測では当初の観測より大幅に短縮されて、あなた方の尺度で"十七箇月"以内に致命的な崩壊が起きるとしているのです！そうなればもう取り返しがつかない。そうなる前に先ずあなた方の正式な承認の許に"移住"を開始したいのです。単刀直入に申します、アフリカ、若しくは南アメリカの未開の空白地帯の幾つかをご提供願いたい。了承戴ければこの変動で予想されるこの"惑星"への影響のデータを幾つかの"技術"と共に供与する準備があります。其れによってあなた方も幾らかの被害を事前に回避出来る事となるでしょう。。。

１年半？ 其れは無理だ！そんな短期間に調整が出来る筈はない！

先ず、我々は貴方がたがどういった種族...いやおかしな表現だが構わない、種族でどんな考えを持って、そもそも好戦的であるのか友好的であるのか？ ...科学力があるのは判っている。現在のneurological syber-web（*インターネットの進化系）のそもそもの画期的技術が貴方がたから齎されたものである事を見ても明らかだ。人口がどの程度なのか？先ずは其の辺りを明確にして貰えな。。。

（*心の中では、もしこの申し出を"存在"の意向通りに拒否した場合、目の前の扉が即座に開いてきっと世にもおぞましい姿をしているに違いない化け物の一団が溢れ出て自分をなぶり殺し、その後其の侭の勢いで地上を陥れるのではないか？ 我々、人類の兵器は彼等を止める事が出来るのか？...その思いだけが巡りのし掛るのだ！）

繰り返します！其の様な悠長な事を遣っている暇はないのです！
此処であなたからその確約を戴きたい。あくまで友好的に"移住"を執り行いたい！
...しかしながら

ズウウウウウウン。。。と再び遠くの方から地鳴りの様な音が響いたその次の瞬間！ ドンッ！っと激しい縦揺れが部屋を襲う！ 再び地震だ！大きい！！何度も照明が明滅し、身体を支えられずもんどりうった！
翻訳機（*ベレモロシュワルゼ）　は途切れ途切れで雑音をはらみながらも、壁の向こうからの声を伝える。。。

ピィィィ...だ、大統領、ど ガァァァ...うか確約を！

*次の瞬間！こちら側の部屋の天井が崩壊する！！！

ズズズズズズズズズズズズズズズズズ。。。継続する激しい揺れ。

ドンドンドン！（*入ってきたドアを外から激しく叩く音。）

『大統領！此処は危険です！退避を！！』外で叫ぶ声、しかし内部には届かない。。。

身体を何とか支えながら最後にマイクに向かって発した言葉。。。

『...我々は貴方がたを受け入れる事は出来ない！』

それは"存在"の結論付けた事であり、未知なる"種族"との共存模索より自己（及び利権）保守を旨とした殲滅すべき脅威の対象として...イコール人類の歴史で"存在"が形成されてから執り行われた"魔女狩り"の類い、そして意図的に仕組まれ（スケープゴートを巧みに擁立て...）た過去の種々の諍い・戦争となんら変わりはない。。。その"意思"以外なにものでもないのである。

剥がれた天井から降ってくる礫、倒壊し始めた壁面！これ以上此処へ留まるのは危険だ！
.....完全に沈黙した翻訳機（*ベレモロシュワルゼ）。　返答は無い。。

果たして最後のこちらの言葉は相手に届いたのか？会話は成立したのであろうか？ 知るべき術も無い。しかし意図は伝えた！これだけが事実であり合法的に（なにを以て"合法"なのか？）宣戦布告をも意味する。そして其の意味の大きさを我々、人類は未だ知らずに居る。。。

重い扉をなんとかこじ開け、大統領は部屋を飛び出す！SPに脇を抱えられ緊急避難用エアカプセル（*瞬時に地上目掛けて噴出される。）に押し込まれた！

。。。そして隔てた扉の向こう側、もうひとつの生命体は...。

『...君は?』

モニターに映った姿。

女性？

...そう、昼間の"検診"でのあの診療所の受付（？）の女性。何故？

『Mr. ツカモト！』
動悸が荒いのが上下する肩とその表情から看て取れる、その後方で訝しがりつつ制止する保安の姿が見え隠れする。

『Mr.ツカモト！ 私、今日あなたが訪れた診療所の丁 茉莉（ディン・ムゥリー）です。ハァハァ...大切な用が有って来ました。。。』
息があがっているのが顕著だ。

『Miss. 丁、走って此処まで来たのかい？』
昼間の訳の分からない不可解な状況に、かなり皮肉を込めて第一声を発してみた。（実際、頭に来ていたのは確かなのだが...）

『...大切な用件なんです。ハァハァ。。。』

『もう、線に繋がれたり、麻酔嗅がされたり得体の知れない映像見せられたり、痛いのはもうご免だよ！』

『Mr. ツカモト！冗談言ってる場合じゃないの！今直ぐに開けて！ハァハァ...你必须闭嘴～！』
丁寧な口調から急変し挙げ句の果てには静止する保安に怒鳴る姿が映る。余りにも...な剣幕に僕は気圧される様に、

『わ、わかったよ　Miss.丁！ 今開けるから。』
保安に大丈夫、知人で問題無いから...な旨を断って開門のボタンを押した。。。

...程なくして、ドアをノックする音。既に入り口の脇に立っていた僕はチェーンを外しドアを開けた。
両手を膝に置いて上半身を屈め息を切らしている姿が飛び込んでくる。よく見ると服は汚れ手には擦り傷やら血が滲んでいる！

もう一クダリ、皮肉のウェルカムでも言ってやろうと思ってたが明らかに様子が尋常ではない。
『Miss.丁！ ？』

『Mr.ツカモト、よく聞いて！ 今直ぐ此処から逃げるの！！危険なの！』

『な、何が？ おいおい、いきなりどういう事なんだ？』

バタン！と僕を押しやり扉を閉め部屋に入って来た彼女は息を切らしながら続ける...。
『いいから！直ぐに必要なものだけ持って！』

困惑した僕は、なにがなんだか訳が分からず再び彼女に向かって問いかける。
『待ってくれ！ 意味が判らないよ！危険って何故？ 爆弾でも降ってくるのかい？ それとも軍隊が殺しに遣ってくるのかい？』

『...そのニュアンスに近いわね。。。』

『...。』
こちらをキッ！と見上げた瞳は一切、笑ってない。予期しない応えに一瞬、言葉を失った。

『...おいおい、冗談だろ？ なにもやっちゃあいないぜ？』

『あなたはやってなくとも、あなたの頭の中にある"モノ"が問題なの！それに。。。』

"頭の中のモノ"？？なんの事だ一体？？ ...そして彼女は続けた。
『私の父も殺されたわ...。此処に来る前。』

『な、なんだって？？』

『お昼間のお医者さん。私の父だったの...。いい！あとで道々詳しく離すから。。。兎に角今は急いで。』
明らかにトーンダウンした口調。

僕は相変わらず当惑・混乱していたが、しかし何処か本能的に何かに追い立てられる様に慌ただしく動き出す。
昼間、NIKONを入れた侭のヘルメットバックに財布、パスポートの類いを投げ入れて...そして昔、父親から貰ったPATEK PHILIPPEの小さいゴムバンドの時計を腕に巻いて、Tシャツの上にシャツを羽織って彼女と共に部屋を飛び出した。

エレベーターのボタンを押す。
『待って！非常階段。そしてエントランス以外の出口はある？』

踵を返して突き当たりのドア迄引き返し、そして薄暗い階段を足早に駆け下りる。足音が幾重にも谺し響き渡り。何処迄も永遠に続いていそうな、いや、"底"迄続いている坑道にも似た。。。何故、そう思ったのかは判らない。なんとなく感じただけ...。やがて２人は地下の駐車場迄降り、辺りを見計らって車用の出口から用心深く裏通りに出て夜半前の通りの闇に紛れた。。。

無言の侭、疎らな夜の通りを足早に往く２人の影。。。

辺りを頻りに気にしながら歩を進める女性の方。TAXIを停めると乗り込む。

『さぁ、miss 丁、説明してくれ！何が一体どうなってるって言うんだ！？』

『到、南站。。。』と司机（ドライバー）に告げる女性。

車が動き出す。ほっ...と安心したかの様に反対側の窓際に身体を預けもたれ掛かると

『15分くらいで駅に着くわ、上手くチケット買えるといいけど。。。』独り言の様に呟く。小刻みに震える肩を見てしまうと其れ以上、語気を荒めて問い詰める気にも為らず彼女の口が開くのを待とうか？...と思った次の瞬間、彼女は瞬間大きく息を吸い込んで徐にこちらに振り返った。そして堰を切った様に話し出す。

『明日になれば駅も空港も多分、追っ手が迫って来る！いえ、もう今夜も危ないかも？でも出来るだけ早く此処（上海）を離れるの！
向かう先は西蔵自治区の外れ！起こって欲しくなかったけど、こんな時の為に父から聞いてたの。。。私も知らないわ！会った事ないし。あ！それとあなたは外国人だから入境証（西藏自治区旅游局外国人旅藏確認函）必要ね？今からだとどうしようもないから直接、拉薩（ラサ）には入れないか？...一寸、迂回しなくちゃならないわね？(...shit!!)　取り敢えず成都辺り迄出て？...いえ。。。mr.ツカモト、あなた人民币は？』

『miss. 丁？』

結局、TAXIは更に行き先を変え、空港に隣接する虹橋駅から高速鉄道で蘇州へ出て、其処から5000km近い距離を鉄道移動する事に相成ったのだ！幸い駅で不審者から危害を加えられる事はなく車中の人と相成った。。。

夜が空け、車窓からの景色はshanghaiの高層ビルの林立するものから、農村部の風景に変わって既に久しい。。。
miss丁は少し張りつめていたものが緩んだのか、微睡みの中に居る...。

...しかし、何処で何の歯車が狂って、そして何の因果か？中国人女性と列車で内陸部奥地を目指している自分が居る。昨日一日に起こった出来事は未だ自分の中で整理出来ず、『普通、着いて来るか？』な自問も含め、取り敢えず彼女が目覚めるのを待つ事とした。。。